

W-4-1

ワークショップ「構文形態論の新地平」第1発表

広島方言における2つの「よう＋否定」構文の構文形態論的分析

茂木 洸太郎 (東京大学文学部)・高城 隆一 (東京大学大学院)

kotaro-m795g@g.ecc.u-tokyo.ac.jp・taki.ryuichi.0816@gmail.com

1. はじめに

広島方言の副詞「よう ([jo:])」は、否定文において次のように用いられる。

- (1) こなことようせんよ。「こんなことできないよ」
- (2) 人ごみでよう見えんの。「人ごみでよく見えないな」

(1)は心情・能力・内的条件不可能を、(2)は程度が低いことを表す。これら2つの「よう+動詞+ん」という表現はこのような意味の違いだけでなく、アクセントの違いや形態統語的な振る舞いの違いなど、音韻・形態統語・意味の3つの構造にわたって相違点が見られる。さらに、それぞれの表現には部分に還元できない形式的・意味的特徴がある。以上の点から、本発表では2つの「よう+動詞+ん」という表現のうち、(1)のようなものを「不可能構文」、(2)のようなものを「否定程度構文」と呼ぶ。そして、構文形態論で用いられる構文スキーマで両構文を分析することでその違いを明示するとともに、音韻的・文法的な観点から不可能構文は1語である一方で、否定程度構文は2語からなることを主張する。

本発表の構成は以下の通りである。第2節で本発表に関連する広島方言の特徴を述べるとともに、調査の概要を提示する。調査結果に基づいて、第3節で肯定文における「よう」について、第4節で不可能構文および否定程度構文について記述する。第5節では、構文スキーマを用いて不可能構文と否定程度構文を分析する。最後に第6節で本発表を結ぶ。

2. 調査の概要

本発表は、茂木が広島県内で実施した調査の結果に基づいている。安芸と備後の二地域からなる広島県は、両地域間で語彙やアクセントに方言差が認められるという(神鳥 1998)。本発表では、広島市を中心とする安芸地方の方言を指して広島方言と呼ぶ。

神鳥(1998: 25)によると、広島方言のアクセント体系はいわゆる東京式アクセントであり、下がり目の有無と位置が弁別特徴である。また、渋谷(1993: 182)によると、能力可能に「よう」の形式を用いる地域に含まれている。

調査は、昭和23～43年生まれの広島方言生え抜き話者の男女4名(男性3名、女性1名)にインタビュー形式で実施した。具体的には、広島方言で作成した調査票を調査者が読み上げ、それぞれの文の適格性を尋ねる方法で実施した。

3. 肯定文における「よう」

ここでは、肯定文に現れる「よう」の特徴を音韻・形態統語・意味の3つの側面から記述する。

- (3) あの人はようこの辺散歩しよるよ。
「あの人はよくこの辺を散歩しているよ」(頻度)
- (4) あいつはほんまによう食べるね。「あいつはほんとによく食べるね」(数量)
- (5) よう覚えとるよ。「よく覚えているよ」(明確さ)

まず、音韻的には「よう」のピッチが HL で実現することが確認できている (H はピッチが高いことを、L はピッチが低いことを表す)。

次に、形態統語的な観点からは、まず (3) において「よう」とその被修飾語である「散歩しよる」の間に、別の要素である「この辺」が割り込んでいる。さらに (4) においては、「ほんまに」が「よう」を修飾し、より程度が高いことが表されている。これらのことから、「よう」は動詞に付属する要素ではなくそれ自体自立した語であることがわかる。

また、意味としては程度が高いことを表す。さらに分類すれば「頻度」、「数量」、「明確さ」などに分けられる¹。頻度の意味としては「しばしば、頻繁に」、数量の意味としては「たくさん」、明確さの意味としては「はっきりと、十分に」など、いずれもある基準において程度が高いことを表す。ただし、これらの下位分類は明確に線引きができない場合や、個別の例についてはどの分類に当てはまるとも言えない場合もあるため、特別に区別が必要な場合を除いては単に「程度」と呼ぶ。

4. 不可能構文と否定程度構文

ここでは、前節での肯定文における「よう」の記述を踏まえて、否定文で用いられる2つの構文、不可能構文と否定程度構文の記述を行う。音韻構造 (4.1 節)、形態統語構造 (4.2 節)、意味構造 (4.3 節) の順に両構文を比較する。

4.1. 音韻構造

ここでは、両構文の音韻構造、特にアクセントについて述べる。まず、否定程度構文では「よう」のピッチが HL で実現し、これは肯定文のときと同じである。

- (6) よう (HL) + しらん (LHH) → よう知らん (HLLHH) 「よく知らない」

一方、不可能構文では「よう」のピッチが HH で実現する。さらに、後続する動詞の 1 モーラ目が H で実現する。

- (7) a. よう (HL) + たべん (LHL) → よう食べん (HHHHL) 「食べられない」
b. よう (HL) + みん (HL) → よう見ん (HHHL) 「見られない」

¹ さらに、(i) のように称賛や非難を表す「評価」という分類を立てることもできる。

(i) (自分のことを棚に上げて他人の悪口を言う人に対し) よう言うわ。「よく言うよ」

ただし、評価を表す「よう」は不可能構文や否定程度構文と異なる性質を示すため、本発表では考察の対象外とする。

不可能構文では、動詞のアクセントの下がり目の位置が保持されている一方で、「よう」は肯定文で見られる下がり目が失われている。これにより、構文全体で下がり目が1つしか出現しない。これは、窪菌・太田(1998: 85-86)が東京方言における複合名詞のアクセント規則について述べたもののうち、後部要素のアクセント核が保持される「保存型」と類似している。

このことから、否定程度構文は2つの音韻語からなるが、不可能構文は1つの音韻語であると言える。さらに、不可能構文のアクセントは非構成的である。

4.2. 形態統語構造

ここでは、それぞれの構文に統語的な操作を加える3つのテストに基づいて、両構文の形態統語的な性質を述べる。具体的には、構文の一部への修飾、構文内への他の要素の挿入、等位接続時の「よう」の省略である。

○構文の一部への修飾

まず、不可能構文では構文の一部への修飾ができない²が、否定程度構文では(8)に挙げるように構文の一部である「よう」を修飾することができる。

- (8) そがによう知らん。「そんなによく知らない」(否定程度)

この観点からは、不可能構文は1語であり、否定程度構文は2語からなる。

○構文内への他の要素の挿入

次に、不可能構文では構文内に他の要素を挿入できないが、否定程度構文では挿入できる。

- (9) a. *ようは食べん。(不可能)
 b. ようは見えん。「よくは見えない」(否定程度)

この観点からも、不可能構文は1語であり、否定程度構文は2語からなる。

○等位接続時の「よう」の省略

続いて、不可能構文どうしを等位接続したときに2つ目の「よう」を省略することはできないが、否定程度構文どうしでは省略ができる。

- (10) a. *フランス語なんかようしゃべらんし、~~まう~~書かん。
 (「*フランス語なんかしゃべれないし、書けない」を意図)(不可能)
 b. よう見えんし、~~まう~~聞こえん。「よく見えないし、よく聞こえない」(否定程度)

ここでも、不可能構文は1語であり、否定程度構文は2語からなる。

以上3つのテストから、不可能構文は文法的に1語であり、否定程度構文は2語からなると言える。4.1節で見た音韻構造と比較すると、音韻・形態統語の2つの構造における語の単位が一致していることがわかる。

²これは4.3節で述べるように、不可能構文が全体で非構成的な意味をなすためである。

4.3. 意味構造

ここでは、両構文の表す意味内容について述べる。また、不可能構文と共起する主語が有生性によって制限されることについても述べる。

始めに、否定程度構文は程度が低いことを表す。

(11) 最近よう寝れんの。「最近よく寝られないな」

このとき、程度の下位分類としての頻度、数量、明確さなどの意味のうち、主に明確さの意味が現れる³。否定程度構文ではこのように肯定文より意味が制限されており、非構成的である。

(12) a. わしゃ呉の方はよう行くで。「私は呉の方にはよく行くよ」(頻度)

b. *わしゃ呉の方はよう行かんで。(頻度)

(13) a. よう食べる。「よく食べる」(数量)

b. *よう食べん。(数量)

(14) a. ようわかる。「よくわかる」(明確さ)

b. ようわからん。「よくわからない」(明確さ)

他方、不可能構文は心情・能力・内的条件不可能を表す。可能の分類は、渋谷(1993: 27-28)を参考に作成した以下の表の通りである。

表1 可能の分類

可能の種類	動作実現のための条件
心情可能	主体の心情・性格・勇気など
能力可能	主体の持つ(体力・技術的な)能力
内的条件可能	主体内部の「一時的な」気分的・肉体的条件
状況可能(外的条件可能)	主体を取り巻く外的世界

(15) こりゃ大事なものじゃけえ、よう捨てん。

「これは大事なものだから、捨てられない」(心情)

(16) 習ったことないけえ、フランス語なんかようしゃべらん。

「習ったことないから、フランス語なんかしゃべれない」(能力)

(17) お腹いっぱいじゃけえ、よう食べん。

「お腹いっぱいだから、食べられない」(内的条件)

状況不可能は不可能構文で表すことができず、(18b)のような動詞の可能形⁴が用いられる。

³ 否定文を用いて頻度が低いことや数量が少ないことを表すためには、(12b)や(13b)のように「よう」を用いるのではなく、他の副詞を用いる。

⁴ ここで言う動詞の可能形には、可能動詞の場合と動詞+助動詞の場合がある。五段動詞ではどちらの場合も見られ、(18b)では「吸えん」も「吸われん」も用いられる。例文では、便宜的に可能動詞のみを表記した。また、調査では不可能構文として「よう+可能動詞+ん」の形も見られたが、意味としては通常不可能構文と同じ(心情・能力・内的条件不可能)であった。

- (18) a. *この部屋は禁煙じゃけえ、タバコはよう吸わん。(状況)
 b. この部屋は禁煙じゃけえ、タバコは吸えん。
 「この部屋は禁煙だから、タバコは吸えない」(状況)

2つの構文の意味構造について重要な点は、まず不可能構文において現れる可能の意味が肯定文では現れないことである。これは渋谷(1993: 235-237)で論じられている「可能表現における肯否の非対称性」の一例であり、その現象は方言研究、文献研究などの各分野で指摘されているという。また、否定程度構文では主に明確さの意味が現れるという特徴がある。これらの特徴は肯定文にはなく、構文の特徴として現れている。

なお、不可能構文が持つ特徴として、共起する主語が有生性により制限される現象が見られる。すなわち、無生物は主語に置かれない。

- (19) *この飛行機は故障しとるけえ、よう飛ばん。
 (「*この飛行機は故障しているから、飛ばない」を意図)

否定程度構文については、用いられる動詞が「見える、聞こえる、わかる、知る」など、主に人間の感覚や認知に関わるものが多い。よって、無生物については動詞の性質上そもそも主語になりえない。この点において構文の性質としての主語の制約とは言えず、不可能構文との比較はできない。

4.4. まとめ

4.1節から4.3節で比較した、音韻・形態統語・意味のそれぞれの構造における不可能構文と否定程度構文の違いを表にまとめると以下のようなになる。

表2 不可能構文と否定程度構文の比較

		不可能構文	否定程度構文
音韻	「よう」のピッチ	HH	HL
	動詞のピッチ	1モーラ目がH	変化なし
形態統語	構文の一部への修飾	不可	可
	構文内への他の要素の挿入	不可	可
	等位接続時の「よう」の省略	不可	可
意味	意味内容	心情・能力・ 内的条件不可能	程度が低いこと
	有生性による主語の制約	あり	

